

あなたは

ウマ娘

である。上

作・サイリウム

絵・ささみ





※この作品はフィクションです。実在の人物や団体などとは関係ありません。ご理解の方、よろしくお願いいたします。

あなたはウマ娘である。

サイリウム

目次

- 【Ⅰ】 あなたはウマ娘である。……………
- 【Ⅱ】 友達と、レースと……………エラー…ブックマークが定義されていません。
- 【Ⅲ】 情熱のクラシック……………エラー…ブックマークが定義されていません。
- 【Ⅳ】 ドラマチックダービー……………エラー…ブックマークが定義されていません。
- 【Ⅴ】 完全なる負けイベント……………エラー…ブックマークが定義されていません。
- 【Ⅵ】 エピローグ『楽しい世界』……………エラー…ブックマークが定義されていません。



【あなた】

あなた、それ以上でもそれ以下でもない

【ミホシンザン】

かわいい、最近初めて肉まん屋のアイス食べた



【シリウスシンボリ】

かっこかわいい、実は雨が嫌いじゃない



【ミスターシービー】【シンボリルドルフ】【マルゼンスキー】

三人一緒に出掛けるといろいろ大変なことになる、というかなった

【一】あなたはウマ娘である。

先日素晴らしいことに、トレセン学園に入学することができた。もちろん中央のトレセン学園である。

去年は淀の昇り龍と称えられたミスターシービーのクラシック三冠達成、今年度において最も三冠に近いウマ娘として名高いシンボリルドルフがホープフルSの圧勝。それ以外にも多くのウマ娘たちが鎬を削り、レース界隈が非常に盛り上がった。世間は今年度において両者が上のグレードでどのような活躍をするのかを楽しみにしており、中央に所属している者たちはそれに続こう、もしくは阻止し自分の時代にしてやろうと息巻いている。今年の新入生がその熱気に当てられ闘志を燃え上がらせるのも不思議のないことだろう。

もちろんあなたもその一人だ。……まあ建前だけが。

あなたには今のところ明確な目標は持っていないが、レース業界で活躍しその名を世界にとどろかせようという意思はある。いまからどんなレースに出走し、勝利するかを考えると少々楽しい。しかしながらあなたはレースよりも

この世界を楽しむことに重きを置きたい人種である。

なお、今現在は入学式翌日の授業説明や各施設の利用の仕方などのこまごまとした事項が担任によって説明されている。あなたは勿論何も聞いていない。今は脳内で自身が勝利する瞬間を思い浮かべるので忙しいのだ。そしてもちろんその後ちやほやされ、賞金で大好きな甘味をたらふく食べる。ああなんと素晴らしき人生だろう。口からよだれを出し、ニヤニヤするのも致し方ないというものだ。

一応、説明に用いられている書類は昨日配られており、あなたはそのすべてを読了している。この書類群、結構な厚さがあり先日まで小学生であったあなたには少々手が出にくい物であったが、することが無かったため昨日の夜にすべて読み込んでしまった。寮生活なのに同室の仲間、先輩がいなかった独り者の悲しい性である。せっかく同室の者と修学旅行の夜のようにトランプでもしばこうかと考えていたのに……、一人でトランプパワーを積み上げるのに飽きたが故の読書であった。

ちなみにだが今週行われる授業範囲の予習もすでに終わらせている。実家の母が異様に厳しかったため、こちらに

入学する前に色々やらされたのが原因だ。まあ先に苦勞した分今週は授業中寝るなり遊ぶなり好き勝手出来るからいいかと思うあなたであった。

時間は過ぎ、昼食後のレース場である。

もちろんのことであるが昼食時も妄想に耽っていたため一人で食事を終わらせた。クラスにも食堂にも話しかけてくれるやさしいウマ娘はいなかったようで少し残念に思うあなた。まあそれも仕方のないことで、ほんの一月前まで小学生だった彼女たちウマ娘がいきなり寮に放り込まれ、お互いの距離感のつかめないまま寮生活を開始するのだ。自分の席に座ったまま何故か、涎を垂らしてニヤニヤしているあなたに声をかけようと思うものはいないだろう。いたとしてもかの有名な大天使ウララぐらいであるが、残念ながら時代が早すぎた。大天使は現在高知の小学生である。

今日の授業としては午前中の一般教養などを扱う通常授業、午後からは全クラスでの模擬レースが開催されることになっていた。この模擬レースは学園側が単純に自分の力量を確かめよう、という理由で開催されるものだが、それ以外の思惑も存在している。入学前のスカウトを行い問題が発生した事件を鑑み、現代のトレセン学園では入学テストで行われるレースの見学を非公開としている。しかしながら今日行われる模擬レースは誰でも見学可能。つまり中央トレセン学園に所属しているトレーナーたちが初めて新入生の実力をしっかりと見ることができるところであり、選抜レースの前に先んじてスカウトできる場でもある。

そのことを理解しているあなたたちは、入学したばかりのひよっこであるがやる気十分。トレーナーたちも目の前に広がる素敵な鉱山から、石の中に潜む宝石の一粒を青田買いしようとしてキラキラしている。あなたとしてはあまり興味のないイベントだったが、周りの空気に乗せられたのか少しだけやる気が出てきたようだ。

ちなみに、トレーナー側から見て注目されているのは

○優秀な生徒のために用意されている数少ない学園推薦枠を勝ち取り、一般の出ながらもかのシンザン会長の遠い親族でもあるミホシンザン

○入学試験で優秀な成績を収めており、シンボリの分家ながら新入生と思えない覇気を持つシリウスシンボリ

○同じく入学試験のレースで優秀な成績を収めた上、タイムオーバーを記録したあなた

の三人である。そのせいかトレーナーたちが様々な機器を抱えて見学をしている観客席、そこから異様な数の視線を感じるがそもそもあなたは周りの目線を気にしない、というか気づかないタイプなので注目されようが関係がない。好きなように走って好きなように勝つのみである。

なおあなた方ウマ娘から見て注目されているチームは

○現在生徒会長であるシンザンの所属するチーム

○昨年三冠ウマ娘になったミスターシービーが所属するチーム

○去年設立し、シンボリルドルフの所属するチームリギル

の三つが上げられる。ちなみに何故リギル以外ちゃんとした名前がないかというと、チーム名が基本的に担当トレーナーの名字がそれにあたるというのが理由だ。『○○さんとこのチーム』というふうに使われているため、基本的にチーム名を定める必要性がこれまでなかったのである。あなたは知らない話ではあるが、何故リギルが浮いている状態なのかというと担当トレーナーである東条ハナが登録書類にある、これまでなら単に名字を書けばいいところの『チーム名』欄を勘違いし、『今後のためにも良い名前を付けねばならない』と思いきり同期のトレーナーと徹夜して考え

たのが理由だ。

後日おハナさんは自分たちだけ名前を付けてしまったせいで、まるで『中学二年生が自身の持ち物に“漆黑”とか謎の記号を付けていた記憶を成人後に思い出した時に感じる羞恥』のような感情に苦しめられることになる。

あなたとしては、注目しているのはチームスピカである。シンボルドルフという未来の三冠ウマ娘が存在しているリギルよりも、同じく変なチーム名であるスピカに非常に興味を持ったのだ。資料を見たところ誰も所属していないそうなので入った瞬間にチームエースである。エースということはつまり一番で強いということ、まさに自身にピッタリな称号であるため非常に惹かれたのだ。なお、これまたあなたが知らないことであるが、『チームスピカは地雷チーム』という噂が学園内で広がっていた。スピカもリギルと同じように昨年設立され、何人かのメンバーが参加していたようだが、そのすべてが参加した昨年の内に脱退しているのである。理由としては『ちゃんと指導してくれない。』とか、『セクハラされた！』などだ。このうわさが同室の先輩などから新人生にすでに広まっており、地雷チームとして避けられていたのだが……、あなたは入学以降同学年と簡単なあいさつぐらいしかしていない、同室もないボツ

チである。噂の知りようがなかった。

そんなこんなで、あなたの出走するレースの番が巡ってきた。出走するのは芝2000の右回り。先ほど述べた注目株はあなたしかない。

自身の力量に絶対の自信があるあなたにとってこれは消化試合に近い、『レースをしなくても結果は解るだろう。』
と言いたいところではあったが、さすがにこれ以上ポッチが加速するのは避けたいところ。やる気がない故か、早く準備してくださいと本日のレースを任切る担任の教師に注意されたが許してほしいものである。しかもその上あなたはゲートというせまつ苦しいあの空間が大嫌い。やる気0で大嫌いなゲート、昔みたいに鞍上を振り落として草でも食んでやろうかと考えたが、どう考えてもデメリットしかない。最悪『じゃあ走らなくてもいいよね。』で飛ばされてしまう可能性もあったため、嫌々ゲートに入った。本当に嫌々、である。

さて、レースの話をしよう。あなたが一番得意とする戦法は『逃げ』である。そのためゲートが開いた瞬間に自身

の確固たるポジションを確保することが重要になってくる。がしかし残念なことにはあなたはゲートが嫌い嫌いの方のないウマ娘だ。現役時代から引退した後でも嫌いだったのだ、三つ子の魂白までとはよく言ったものだが今生においても嫌いなのは彼女が初めてかもしれない。

この場所にいるだけでストレスが溜まる、ストレスが溜まれば集中力が途切れる。集中力が途切れればゲートが開いた瞬間に対応できず所謂『出遅れ』という状態になってしまう。『逃げ』を選ぶウマ娘たちにとっては絶対に避けた状態だ。

が、しかしあなたはそれでもゲートが嫌いである。いくらウマ娘という人間と同等の思考能力を持つ存在が変わったとしても、考えることは同じ。『嫌だなあ〜、ゲート狭いなあ〜、嫌だなあ〜』と悪態を脳内で呟いていると、すでにゲートが開いていた。盛大な出遅れである。

思わず、「あ、やらかした」と口から洩れてしまった彼女だったがこういう出来事は何度も経験している。あなたは仕方なく『ワタシ、サイシヨカラオイコミデスワヨ!』という顔で最後方に位置した。さすがにスカウトが多数いる

前で『集中できてません！』と主張することは『スカウトしてあげません！』になってしまう。さつさとスカウトされてレースに出て、お金を稼いで楽しく遊びたいあなたにとって、この作戦は致し方ないのだ。

あなたはスタミナを溜めることに注力することにした。

さて、レースの結果だが。中盤から溜めていた足を全解放し、前方の集団をぶつちぎったあなたが勝利した。圧勝というほどではないが、まあ3バ身くらいついていたらヨシとしよう。にしても中盤に差し掛かったときに見えたあの茸毛の亡霊は何だろうか。四足歩行の奴が黄金の錨を振り回していたのだが……？ というかどうやって持っていたんだヤツ？ 蹄で鎖は掴めんぞ ???

まあそんなこんなで本日の模擬レース終了。注目株であったミホシンザン、シリウスシンボリ、あなたの三人はすべて一着で終わった。

授業終了の合図とともに、レース場から少し離れたところで観戦していたトレーナーたちがスカウトするために突撃してくる。あなたたちからすれば『私を選べ』という感じである。多くのトレーナーが未来の愛バに向かって突撃するなか、その比重はミホシンザン>シリウスシンポリ>あなたとなった。おそらくであるが、あなたの出遅れがあまりよく見られなかったのであろう。ミホシンザンの方には数十人のトレーナーが向かっているが、あなたのまわりには両手で数えるぐらいしか来ていない。

普通に考えれば両手で数えられるぐらいのトレーナーからスカウトされるのは非常にすごいことであるのだが、あなたの目にはそれ以上にすごいミホシンザンが映っていたためそうは思わなかった。ちょっとだけ拗ねてしまったのは秘密である。

さて、あなたとしてはこのスカウトしてくれたトレーナーの中から誰かを選ぶ、もしくは丁寧に断る必要がある。一般的に考えた場合、この場で行うべきことは自身の夢について語る、各トレーナーが提示する条件を吟味するなどがあると思う。あなたも、このどちらか、もしくはそれ以外のことをするために思考を回さなければならぬのだが

……

あなたは全く違うことを考えていた。幼少期、近所の子たちと遊んだ時によくしていた『○○したい子この指とーまれ！』がこの状況が酷似しているなあ、と考えていたのである。自身が中央におり、周りに大人たちが群がっている。これはどう考えてもチャンスでしかない。思いついたらすぐ行動に移す、それがあなたのよいところだ。もちろんすぐさま『この指とーまれ！』のポーズをした。

大きく足を広げて仁王立ち、手を腰に当ててがっしりと構え、指を高らかに一本掲げるのだ。『私と走るのこの指とーまれ！』だ。

あなたは、とても、いい笑顔である。

しかしながら周りの大人たちは大混乱である。『この子！』、と決めたウマ娘に対し自分の育成方針や先ほどのレ-

スの感想。目の前にいる彼女の気が引けるように、隣のライバルに取られないように一生懸命にアピールしていたところ、急にポーズを取り始めたのである。しかも、傍から見たら一着のポーズ。

トレーナーたちから見れば『何故に今更勝利ポーズ』というわけである。彼らの頭の中に困惑と疑問、あとコイツもしかして癡バカ？ という思いが浮かび時間が停止した。

そんなトレーナー大混乱の中、特徴的な髪型と、お口にアメちゃん啜えた男性がズイツと前に出てきて、あなたの指を握った。

「オレが、一番乗り……、でいいのか？」

あなたはトレーナーを見上げ、とてもいい笑顔で高らかに宣言する。

『一番乗り！あなたに決めた！』



∞

あなた

∞